

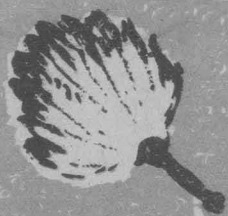
三國志

卷の八

三國志

卷の八

吉川英治著



講談社版

三國志卷八

不許複製

昭和二十二年十二月廿日 印刷
昭和二十二年十二月廿五日 發行

定價 七十圓

著者 吉川 英 治

發行者 東京都文京區音羽町三丁目十九番地
尾 張 眞 之 介

印刷者 東京都文京區久堅町百八番地
大 橋 芳 雄

印刷所 東京都文京區久堅町百八番地
共同印刷株式會社

發行所

株式會社 東京都文京區音羽町三丁目十九番地
大日本雄辯會講談社

振替口座 東京三九三〇
電話(33)代表 一三一
九段 一八六番

共同製本

配給元 日本出版配給株式會社 東京都代田區田路二(九)

鳳凰 果も出て
目次

赤壁の巻

酔計二花

二

大前號令

二四

殺地の客

四一

狂英の瀾

五

群英の會

六八

陣中戲言なし

八五

覆面の船團

九五

風を呼ぶ杖

一〇五

一竿翁

一二九

裏の裏

一三〇

屋簷に出づ

一三七

竹冠の友……………一五四

月鳥賦……………賦 登 大 神 武 産 人 一六二

鐵銷の陣……………禁 崎 恩 曲 卒 四 胆 一六九

孔明・風を祈る……………一八〇

南風北春……………一九四

降参船……………一九八

赤壁の大襲撃……………二二八

山谷笑ふ

三〇

功なき關羽

三四五

市糶三城

二六三

白則羽多蒲扇

二九六

幾箇の朝

一六

且鳥知

裝幀 恩地孝四郎

挿畫 矢野知道人

曾孫の式

二八

酔計二花

一

周瑜は、呉の先主、孫策と同じ年であつた。

また彼の妻は、策の妃の妹であるから、現在の呉主孫權と周瑜とのあひだは、單なる主従だけの關係ではない。

彼は、廬江の産れで、字を公瑾といひ、孫策に知られてその將となるや、わづか二十四歳で中郎將となつた程な英俊だつた。

だから當時、呉の人はこの年少紅顔の將軍を、軍中の美周郎と呼んだり、周郎々々と持て囃したりしたものだつた。

彼が、江夏の太守であつたとき、喬公といふ名家の二女を手に入れた。姉妹とも絶世の美人で、——喬公の二名花

と、いへば呉で知らない者はなかつた。

孫策は、姉を入れて妃とし、周瑜はその妹を迎へて妻とした。——が間もなく策は世を去つたので、姉は未亡人となつてゐたが、妹は今も、瑜の又なき愛妻として、國許の家を守つてゐた。

當時、吳の人々は、

（番公の二名花は、流離して、つぶさに戦禍を舐めたが、天下第一の聲ふたりを得たのは、また天下第一の幸福といふものだ）

と云つて祝福した。

わけて、青年將軍の周瑜は、音樂に精しく、多感多情の風流子でもあつた。だから宴樂の時などでも、樂人の奏でる調節や譜に間違ひがあると、どんなに酔つてゐるときでも、きつと奏手の樂人をふり願つて、

（おや。いまのところは、ちよつとをかしいね）

と、注意するやうな眼をするのが常だつた。

だから當時、時人の謠ふ中にも、

曲ニ誤リアリ

周郎、願ミル

といふ歌詞すら有るほどだつた。

かういふ周瑜も、今は孫策亡きあとの呉の水軍提督たる重任を負つて、鄱陽湖へ來てからは、家にのこしてある愛妻を見る日もなく、好きな音楽に耳を洗ふいとまもなく、ひたすら呉の大水軍建設に當つてゐた。

しかもその水軍がもの云ふ時機は迫つてゐた。魏の水陸軍百萬乃至八十萬といふものが南下を取つて、

我ニ質子ヲ送り、

我軍門ニ降ルカ

我ニ兵ヲ送り、

我粉碎ヲ受ケルカ

と、頗る高壓的に不遜な最後通牒を呉へ突きつけて來てゐるといふ。

もとより周瑜がそれを知らないはずはない。併し、彼の任は政治になく、水軍の建設とその猛練習にある。——今日も彼は、舟手の訓練を閲して、湖畔の官邸へひきあげて來ると、そこへ孫

權からの早馬が來て、

『すぐさま柴桑城までお出向きください。國君のお召です』

と、權の直書を手渡して歸つて行つた。

『いづれは……』

と、かねて期してゐたことである。周瑜は、ひと休みすると、すぐ出立の用意をしてゐた。ところへ、日頃、親密な魯肅がたづねて來て、『いま、お召の使があつたでせう。實は、その儀に就て、あらかじめ提督にお告げしておきたい事があつて参つたのです』

と、孔明の來てゐる事情から、國臣の意見が二つに分れてゐる實情などをつぶさに話し、——それに加へて、こゝで呉が曹操に降伏したら、すでに地上に吳國はないも同様であると、自分の主張をも痛論した。

『よろしい。ともかく、孔明と會つてみよう。——柴桑城へ伺ふのは、孔明の肚を訊ねてみても、決して遅くはあるまいから、ともかく彼を伴れて來給へ。それまで登城をのばして待つてゐるから』

周瑜のことばに、魯肅は力を得て、欣然、馬を回して行つた。——すると、同日の午過ぎ、又もや、張昭、顧雍、張紘、步騭などの非戦派が、打揃つてこゝへ訪れ、

『魯肅が來たのでせう。實に怪しからん漢だ。何の故か、彼は孔明のために踊らされて、國を賣り、民を塗炭の苦しみに投げこまうと、ひとりで策動してをる。——この危機と岐路に立つて、

と、周瑜を圍んで、論じ立てるのであつた。時、先主、麋竺上座のへまに解き合はれ、國を分

「各々の御意見はみな、不戦論に一致してゐるわけかな？」

『同感だな。實は自分も疾くから、こゝは戦ふべきに非ず、曹操に降つて和を乞ふのが呉の爲だ』

と、云つた。利なるに依りて、實利、さう難外無ず、と云ふものの其言は、皆だ「己」を以て六の

客間に通されるやいな、程普、黄蓋など交々に口をひらき出した。

『われ／＼は先君破虜將軍にしたがつて呉の國を興して以來、ひとへに一命はこの國に捧げ、萬代鎮護の白骨となれば、願ひは足る者共です。然るにいま、呉君に於かれては、碌々一身の安穩のみを計る文官たちの弱音にひかれて、遂に、曹操へ降伏せんかの御氣色にうかゞはれる。實に殘念とも何ともいひやうがありません』

『たとへ吾々の身が、すた／＼にされようと、この屈辱には忍び得ない。誓つて、曹操の前に、この膝は屈せぬつもりです。——提督は抑、この事態にたいし、いかなる御決心を抱いてをらるか。けふはそれを伺ひに來たわけですが』

と、周瑜を圍んでつめ寄つた。

周瑜は、反問して、

『では、この座にある方々は、すべて一戰の覺悟を固めてをるのか』

黃蓋は主の言下に自分の首すぢへ、丁と手を當てて見せながら、

『この首が落ちる迄も、斷じて、曹操には屈伏せぬ心底です』

と、云つた。

ほかの武將も、異口同音に、誓ひを訴へ、即時開戰の急を、激越な口調で論じた。

『よし／＼、この周瑜も、元より曹操如きに降る氣はない。併し、けふの所は一先づ靜かに引揚

げたがいゝ。事は明日決するから』

と、なだめて歸した。

夕方に迫つて、また客が來た。刺を通じて、

『——これは關澤、呂範、朱治、諸葛瑾などの輩ですが、折入つて、提督にお目にかゝりたい』

なほ附け加へて、

『國家の一大事に就て』

と申し入れた。

この人々は、いはゆる中立派であつた。主戰、非戰、いづれとも考へがつかない爲に來たので

ある。

周瑜は、その中にある諸葛瑾を見て、まづ問うた。

『あなたはどうか考へてゐるのですか。あなたの弟諸葛亮は、玄德のむねをうけて、吳との軍事同盟をはかり、共に曹操に當らんといふ使命をもつて來てをる由だ』

『それ故に、てまへの立場は、非常に困つてをります。彼は孔明の兄だと觀られてをりますから。

——で、實は、わざと商議にも關はらず、心ならずも局外に立つて、この紛論をながめてゐるわ

けです』

『それは、どうかと思ふな』

『と周瑜は唇元を歪めて、』

『御邊の立場は分るが、兄であるとか弟であるとか、そんな事は私事だ。家庭の問題とはちがふ。孔明はすでに他國の臣。御邊は呉の重臣。おのづから事理明白ではないか。呉臣として、貴公の信する所は、戦ひにあるのか降伏にあるのか』

瑾は、沈黙してゐたが、

『降参は安く、戦は危ふし。呉の安全を考へるときは、戦はぬに限ると思ひます』

と、やがて答へた。

周瑜はゆがめてゐた唇元から一笑を放つて、

『では、弟の孔明とは、反対なお考へだな。なるほど御苦衷だらう。——ともあれ大事一決の議は、明日、それがしが君前に伺つた後にする。今日は歸り給へ』

かくて又、夜に入ると、呂蒙だの、甘寧だのといふ名だたる將軍や文官たちが、入れ代り立ちかはり、この門へ入つては忽ち出て行つた。それは實に夥しい往來だつた。

三

夜が更けても、客の來訪はやまない。そして、

『即時開戦せよ』

といふ者があるし、

『いや、和を乞ふに如かず』

と、唱へるものがあるし、何十組となく客の顔が變つても、依然、云つてゐることは、その二つのことを繰返してゐるに過ぎなかつた。

ところへ、取次の者が、そつと主の周瑜に耳打した。

『魯肅どのが、仰せに従つて、たゞ今、孔明を伴れて戻つて見えられましたが』

周瑜も小聲でいひつけた。

『さうか。では、他の客にはそつと、べつな部屋へ通しておけ、奥の水亭の一室がよからう』

それから周瑜は、大勢の雜客に向つて、

『もう議論は無用にしてくれ。すべては明日君前で一決する。各々は立歸つて明日のために熟睡しておくべきだらう。その方がどんなに意義があるかしれん』